

## 岩手医科大学歯学会第5回総会抄録

日時：昭和54年10月27日（土）午前9時

会場：岩手医科大学歯学部講堂

座長 甘 利 英 一

## 演題1 Hurler 症候群舌の病理組織学的研究

○野田 三重子, 竹下 信義, 佐藤 方信  
鈴木 鍾美

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座

Hurler 症候群は酸性ムコ多糖代謝異常症で、常染色体劣性遺伝の形式をとる。臨床的には怪人様顔貌、角膜混濁、濃いまゆげ、関節硬直、肝・脾の腫大、水頭症、知能障害などの他、口腔内所見として特に巨舌などが見られ進行性に経過して死亡する。

今回、我々は本症候群とみなされる2症例の剖検例を経験し、特に舌について病理組織学的に検索しその腫大をもたらず組織学的背景などについて考察を加えたので報告した。症例は姉妹例で、姉（症例Ⅰ）は生後7カ月の時、特異な顔貌、肝脾腫、臍ヘルニアなどから Hurler 症候群を疑われ、尿中酸性ムコ多糖陽性、ウロン酸排泄の増加により本症候群と診断された。その後角膜混濁が見られ、3歳6カ月で死亡した。妹（症例Ⅱ）は生後間もなくガーゴイル様顔貌、尿中ウロン酸排泄の増加などから姉同様 Hurler 症候群と診断されその後脊柱変形、喘鳴などが発現し1歳5カ月で死亡した。また家族歴では特記事項はない。この2症例の臨床的経過、X線所見、病理解剖所見などの詳細は先に岩手医学会誌 31 : 315-325, 1979 に発表されている。

舌の組織学的所見では舌粘膜上皮の肥厚、粘膜下結合組織および筋層における膠原線維の著明な増生と、これらの間に空胞細胞の著明な増加がみられた。これらの線維および細胞が舌を腫大させている組織学的背景をなすものと考えられた。

神経線維でみられる変化は、神経線維束内のヘマトキシリン好性、Al-EI 陽性の雲架状の物質でその染色性から酸性粘液多糖類が沈着しているものと思われた。神経線維自体にもじゅず状変化、棍棒状変化、空

胞化がみられ、また電顕的にも神経鞘細胞や軸索には lumellar inclusion が出現するなど一連の変性像がみられた。

舌の各部位でみられた空胞細胞の組織化学的性状は、PAS 弱陽性、ムチカルミンにも症例Ⅱのみ弱陽性を示し、本細胞の蓄積物質は粘液多糖と考えた。一方 TB, LFB, ズダンⅢなどでは染色されず脂質の蓄積はみられなかった。

## 演題2 乳歯列における切端咬頭頂連続曲線 (Deep over bite) について

○守口 修, 野坂 久美子

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

永久歯列の切端咬頭頂連続曲線について、Strang, Jarabak, 納村らは正常な機能的平衡状態ではこの彎曲は浅いが、被蓋の深さが増加するにつれて彎曲は強くなると述べている。そこで永久歯列の不正咬合と切端咬頭頂連続曲線の強さに関連があるならば、その彎曲の強さはいつ頃から発現したものであるか検索する必要があると思われ、今回は過蓋咬合を有する2~5才までの乳歯列者87名についての上顎切端咬頭頂連続曲線を求めた。さらに、すでに野坂らが報告した正常乳歯列者とも比較したのであわせて報告する。

研究方法；野坂らの方法に準じて行った。左右乳中切歯縁正中点と左右第2乳臼歯遠心頬側咬頭を含む平面を咬合平面として、この平面を Ney のサベーカーを使用し、上顎歯に投影描記した。この基準面から上顎各歯の切端咬頭頂最突出点までの垂直距離を測定した。

結果及び考察；乳歯列過蓋咬合者の切端咬頭頂連続曲線は、乳犬歯で各年令間に差はみられたが、全体的には年令間にあまり差はなくほぼ同様の曲線を描いた。すなわち、乳中切歯、乳犬歯を最下点とし、第1、第2乳臼歯へ移行するにしがって咬合平面に近接する彎曲を描き、特に乳犬歯から第2乳臼歯に向って急な